

人物で語る 日本デンマーク

⑪ 岩瀬和市Ⅰ

安城の農業が日本デンマーク農業といわれるのは、農業経営の「多角化」と「共同化」をめざして努力したことによる。特に共同化は産業組合の活動によって本格化するのであるが、碧海郡及び安城の産業組合の発展に生涯をかけて尽力したのが岩瀬和市であった。

岩瀬和市は一八九一年（明治二十四年）、碧海郡古井村（現安城市古井町）の農家に生まれた。十四歳の時から農業に従事する傍ら、青年会の夜学校などで勉学にいそしんだ。夢は「村一番の百姓」になることであった。そのころから、全国的に産業組合が設立されるようになってくる。

産業組合とは、現在の農業協同組合の前身となる組織で、農家が出資金を出し、それを基に信用事業を行う組織である。その普及をめざして、一九〇〇年（明治三十三年）に産業組合法が成立した。そのことから信用事業だけでなく、購買・販売・利用事業もできるようになり、それらのいくつかを組み合わせ、

碧海郡でも相次いで集落単位に産業組合が設立されるようになった。一九三二年（昭和七年）ごろには、碧海郡で七十四組合、安城町で二十六組合となり、全国的に見ても活動の盛んな地域となった。

そのような中で、一九一五年（大正四年）、古井産業組合（信用・購買・販売）が設立された。和市二十四歳の時のことである。設立当初から父孫市の代理として活動を開始し、一九二〇年（大正九年）には自ら組合長となり、名実ともに古井産業組合のリーダーとして活動することになった。

和市はまず農業倉庫を建て、続いて組合事務所を新築した。これによって米穀などの保管と販売が促進されることになった。その販売実績は、大正末年には明治末に比べて三十三倍にも達した。また、電化工場を新設して



▲JA あいち中央古井支店

精米機や豆粕粉砕機などを備え、利用事業も活発に進められるようになった。精米などはほとんどの農家で利用された。そのほか、購買事業において組合員の必



▲岩瀬和市胸像（赤松町）

要とする物資を全部取り扱うようにし、その購買額は、大正末年には事業開始時に比べて十倍に達した。同様に、信用事業では、貯金額で三十三倍、貸付金も十二倍に増加した。

和市は産業組合の運営に当たりながら、山崎延吉の勧めにより修養団に入団し、その活動も熱心に取り組んだ。修養団は、「愛と汗」の二大目標を掲げて、明るい住みよい社会を建設することをめざしていたことから、和市中この精神のもとに産業組合の活動に邁進（まいしん）していった。和市の雅号「汗堂（あせどう）」はここからきている。

一九二七年（昭和二年）、古井産業組合の事務所と農業倉庫を、現在の古井支店の位置に移転し、一九四〇年（昭和十五年）には、木造二階建の当時としてはかなり大規模な新事務所を新築し、組合員に喜ばれたという。

こうして古井産業組合は、碧海郡内でも模範的な組合として日本デンマークの発展を支え、多くの視察者をひきつけることとなった。

文 大見 功